

T E X T U R E

F R O M

T E X T I L E

V o l . 2

時 間 の 衣

—

高 橋 大 雅

ヴィンテージ・コレクション

HOSOO GALLERY

HOSOO GALLERYでは、「Texture from Textile Vol. 2 時間の衣—高橋大雅ヴィンテージ・コレクション」と題し、ファッションの分野をはじめ、近年、多方面から耳目を集め高橋大雅が蒐集した1900年代初頭の服飾資料のコレクションを公開しています。

同時に、2022年12月3日(土)-11日(日)の期間には、高橋が手がけた京都・祇園にある総合芸術空間「T.T」、および高橋の美術作品を、建仁寺塔頭両足院にて関連展示として公開を行なっています。

本シリーズ「Texture from Textile」は「織物から建築へ」をテーマとし、織物(テクスチャー)に端を発した、工芸、アート、デザイン、建築にまつわる思想の変遷を20世紀初頭に立ち返り研究活動を展開するリサーチプロジェクトです。Vol. 1「コンストラクションの系譜」では、インテリアを含めた豊かなテクスチャーが人々の生活をコンストラクト(建設)するという発想のもと、織物の観点から建築史を再考するプロジェクトとしてHOSOO GALLERYにて公開いたしました。

Vol. 2では高橋のコレクションを通じ、同時代の服飾に焦点を当てます。服飾史も決して建築から乖離したものではなく、1900年代初頭(1900-1930)のヨーロッパでは装飾美術運動などの影響を受け、テキスタイルを介してファッションと室内装飾が不可分なものとして扱われていました。高橋の服飾コレクションは、1900年代前半を中心としたアメリカ・ヨーロッパを中心に生産された衣服であり、大量生産とデザインといったさまざまな問題提起のなかで生産されてきた衣服です。これらの衣服は、大量生産を単に否定するわけではなく、経済的合理性の追求によってもたらされた新しい時代の美意識の一つの到達点であり、また1900年代初頭に起こった大量生産と工芸をめぐる社会的な現象を象徴するものとして捉えることも可能です。

高橋は、10代より主に1900年代の服飾資料を約2,000点蒐集し、リバースエンジニアリングの観点から、当時の布地や縫製の技術を研究してきました。当時の生地を研究することで、日本の伝統技術や天然素材など、現代の日本ならではの製法で再現し、ヴィンテージの衣服同様、100年後に残るような服づくりを目指し、探究を行なってきました。

この度は、高橋の残した服飾資料を展示することで、新進気鋭のデザイナーの思考を辿るとともに、Vol. 1と同様、20世紀に起きた装飾をめぐる美意識の変革について、衣服の視点から改めて焦点を当ててみたいと思います。

主催：株式会社 細尾、TaigaTakahashi,inc.

協力：一般社団法人 hO

ディレクター：細尾真孝 キュレーター：井高久美子 空間構成：周防貴之 宣伝美術：森田明宏

PR：青柳桃子 テキスト編集協力：原瑠璃彦

衣服のヴィンテージ・コレクションを通して思考する時間の力 キュレーター・ノート 井高 久美子

本展では、近年、ファッションの分野からはじまり、建築やアートといった多方面で耳目を集めてきた新進気鋭のデザイナー・美術作家である高橋大雅(1995-2022)が蒐集した1900年代初頭の服飾資料の展示を行なっている。

HOSOO GALLERYでは、2022年、継続的なリサーチ・プロジェクトとして、建築家・細尾直久氏とともに「Texture from Textile」を立ち上げた。本シリーズは、「織物から建築へ」をテーマとし、織物(テクスチャー)に端を発した、工芸、アート、デザイン、建築にまつわる思想の変遷を20世紀初頭に立ち返り研究活動を展開し、展示へと反映していく試みである。本展はそのVol. 2として公開を行うものである。

高橋は、10代の頃より、骨董商を通じヴィンテージの服飾資料や古美術品を蒐集してきた。そして、ロンドンの名門セント・マーチンズ美術学校にてファッションの教育を受けたのち、自身の活動を「応用考古学」と称して、これらの蒐集品を徹底的に研究するようになった。これらの研究を積み重ねていくことで、新たなファッション、美術、建築空間の創出へと、自身の表現活動を広げていった。残念ながら、高橋本人は2022年4月、28歳の若さで逝去された。そのため、「時間の衣」という言葉は、高橋が書き残したテキストから着想を得てつけられた。そのテキストの出だしには以下のように書かれている。

「未来は過去にある。いつも新しいものをつくりたいと思っていた。しかし、いま新しさは飽きることなく消費され時代の奥底へと沈んでいく。そのような社会において価値あるものとはなんだろうか。」

今、直接、本人の言葉を聞くことは叶わないが、これらの残された数々の資料と、そして「Texture from Textile」のリサーチ・プロジェクトの関心事と結びつけながら、考察を試みたいと思う。その中で重要なキーワードとなるのは、「時間がもたらすものの力」である。

まず衣と建築の関係性についておさらいをしたい。1900年代初頭は、ジャカード織機による織物が壁紙の室内装飾として隆盛を極めていた。その背景には、ヨーロッパを中心とした装飾芸術運動がある。そのような時代の中で、1925年にパリで開催されたアール・デコ博覧会(現代産業装飾芸術国際博覧会)は、同時代のファッションおよびその他の芸術運動への大きな影響を与えたとされており、ファッションとインテリアを同じデザイナーが手がけたり、またデザイナー同士が協業し合う一つの契機となった。織物を通じて、室内装飾、家具、服飾が不可分に考えられていた時代であった。

高橋のコレクションには、これらのアーツ・アンド・クラフツ運動、アール・ヌーボーやアール・デコなどの文様を中心とした装飾芸術運動が吹き荒れる1900-30年代に、ヨー

ロッパで生産された衣服が多量に含まれる。しかし高橋は衣服の装飾性について、文様とは少し異なる観点で見ていたようである。この高橋の装飾性に対する思考を読み解く一つの手がかりとなるのは、高橋が制作した「布のドレープ」を題材にした美術作品である。高橋は作品のコンセプト文の中で以下のように書き残している。

「芸術（ファインアート）という概念が誕生する以前に、異なる時代背景や土地で作りだされた古代ギリシャ彫刻、ルネサンス期のミケランジェロ作品、日本の仏像などに共通して、美の共通認識として、布のドレープが描かれていると気付いた。人体に被せた布地の壁がうねっている。そこにはあるのは現実と虚像（写実性と抽象性）が共存する世界。ドレープとは、古代から現代で共通して美と認識することができる伝統的な表現である。」

（展覧会「高橋大雅：不在のなかの存在」アーティスト・ステートメントより）



ドレープを題材にした高橋の作品「陰影礼賛」（2022、石膏、50×72cm）

美術作品の中で、古代においてドレープとは布を豊かに使った装飾の一つであった。古代ギリシャの彫像を見ると、布を腰で留めて身につける「巻衣」が多く登場する。布を体に巻き付ける着方であるため、体のラインに沿って襞が生じる。彫刻で表現されるこれらの布の襞は「ドレーパリー」と呼ばれる。これは英語における「ドレープ（drape）」の語源であるラテン語「drappus」に由来する言葉で、元々は「布切れ」という意味であったようだ。一方、drapeには、「襞」という名詞としての意味に加え、「飾る」という動詞としての意味がある。すなわちdrapeとは布の襞による装飾性を示す言葉であった。古代ギリシャ人にとっての、布を贅沢に使うことで生み出せる襞は、豊かさの象徴であり、社会的地位を指し示すものであった。これらは、地域や時代を超えて、さまざまな彫像に影響を与えたようだ。仏像の衣紋もその影響の一つとされ、襞は「莊厳さ」や「威厳さ」を印象付ける古今東西共通の装飾的なモチーフとなっていたのである。

高橋は、この点に対する興味からだろうか、奈良の秋篠寺に伝わる救脱菩薩立像の衣の残欠（天平時代）を購入し所有していた。その後の高橋の美術作品の創作にとって重要なモチーフとなっている。



1930年代に作られたレザージャケット

布を豊かに使う表現は、衣に立体性を帯びさせる。高橋のコレクションを見ると、1900年代前半のヨーロッパ文化の影響を受けた衣服は、非常に立体性を帯びていることがわかる。高橋のファッショニ・デザイナーとしての代表作の一つであるレザージャケットは、1930年代のヴィンテージのレザージャケットを徹底的に研究することによって作られた。このレザージャケットは、この時代の衣服の立体性を最も象徴する資料の一つといえよう。高橋曰く、このレザージャケットは、ファッショニというより、馬に乗る際に着用されていたもので、身を守る道具としての意味合いが強かったという。革は原始時代から使われている素材であり、丈夫である反面硬い。そのため、当時の人々は、立体裁断を行い、馬に乗る際に不便が生じぬよう袖を湾曲させていたという。これを高橋は、馬に乗っていた時代の身体のフォルムの記憶であり、このように身体の動作に合わせて作られた立体こそが1900年代初頭（1900-1930）のヨーロッパの衣服を象徴

するものと見る。本展では、当時のハンガーに吊るして展示を行なっているが、これはこの時代のヨーロッパの衣服がハンバーにかけたとしても立体的なフォルムを維持できる点を強調するためである。

一方で、1930年代に入るとアメリカで発展した衣服の大量生産による合理化は、これらの立体的なフォルムは見事に削ぎ落とされていくこととなる。衣の襞はおろか、曲線はほとんどなく、ほぼ直線で構成されるようになった。これらの衣服をハンガーにかけば非常に平面的な印象を与える。本展では、1910-30年のイギリス、フランス、そしてこれらの国の影響を受けたアメリカの衣服から、1940年代以降のアメリカの衣服へとグラデーションを作つて設置しているが、これらのフォルムの変化を眺めていると、オートクチュールの立体的な衣服から、徐々に平坦な衣服へとパターンが変容していく様がみて取れる。第一次世界大戦終焉後の1920年代以降は、アメリカがヨーロッパ諸国とは異なる独自の文化を作っていく転換期となった時代であり、服飾の製法にも大きなターニングポイントとなった。その一つがデニムジャケットである。



1940年代にアメリカで生産されたデニム・ジャケット

高橋曰く、アメリカ型資本主義社会を背景に、伝統的な手の技がなくとも生産可能な体制で生み出された服の仕様や設計には、デザインといわれる要素が全くといってよいほど存在していないという。しかし、高橋はその直線的な衣服を、単なる批判的な精神で見ていたのではない。高橋は以下のように発言している。

「直線的な縫製、平面的なパターンによる簡易化、重労働に耐えるための、生地の耐久性やポケットの形状…、当時デザインという概念は恐らく言語化されていなかつたのではないかと。そして、自分のなかで、それらが着物の設計と合致している部分が多いのではないかと思い至りました。世代を超えて、引き継がれるもの。日本古来の和装の精神性とアメリカの大量生産の合理的なマインドを融合させられないか。それが、今回のコレクションのスタートにありました。」

(高橋大雅 MONTHLY JOURNAL SEP. 2021より)

高橋が、アメリカの生産合理性において、デザインという意識すらなく生み出された衣服に、日本の着物との類似性を見出していた点は興味深い。元来、着物は何世代にわたって着用することができる衣服である。その一つの機能的要因として、着物のパーツは直線的に裁断されており、解くことが容易であり、解いた布を繋ぎ合わせることで、再び反物の形状に戻すことができる点にある。これは「洗い張り」と呼ばれ、反物の状態に戻して洗うことで、再び美しさを取り戻し、また仕立てる際に、着用者の体型に合わせて着丈を微調整することもできる。この合理的な仕組みによって、何世代にもわたって着物をメンテナンスし受け継ぐことができる。このような着物の事例を考えてみると、合理的に導き出された形状には、長い時間、物を生き残らせる力を宿させる秘訣があるように思える。洗い張りができる訳ではないが、生産の効率性を重視し、直線で構成された1940年代のアメリカ生産されたデニム・ジャケットも、70年の時を経ても、今なおヴィンテージの衣服として人々を魅了している点も興味深い。高橋が自らの表現活動に取り込もうとしてきたのは、衣の豊かさがもたらすフォルムへの憧憬だけではなく、合理性の追及によって生み出された無駄のない衣服に見出すことができる、ある種の普遍性ではないだろうか。そして、長きにわたり生き残るこれらのものに、時間がもたらす特別な力を見出していたのではないだろうか。その力とは、ものが発する、人々に愛着を感じさせる魔力のような力ではないか。

建築史家の加藤耕一は、ウェブサイト「10+1」での連載『アーキテクトニックな建築論を目指して』の中で、人間／非人間あるいは主体／客体（対象）のあいだのヒエラルキーを解体するというブルーノ・ラトゥールの「アクター・ネットワーク理論（ANT）」に触れ、人からの働きかけだけではなく、建築（物）が主体となる働きについて、聖遺物に宿る力「ウィルトゥス」を事例にとつて説明している。ウィルトゥスは、ラテン語で「徳」を意味し、聖人の遺体や遺骨、さらには聖人となった人が生前身にまとった衣服や手を触れた事物などは聖遺物と呼ばれるが、聖者にまつわる多岐にわたる品々のことであり、これらのものが宿す特別な力は「ウィルトゥス」と呼ばれたとある。このウィルトゥスは、ものからウイルスのように伝搬すると考えられており、病気などを癒す力があると考えられ

ていたようだ。時に人々は布などに聖遺物のウィルトゥスを移しとり、持ち帰っていたという。加藤は、「建築における21世紀的な豊饒なマテリアルを追求するうえで、それらのマテリアルがなにかウィルトゥスのようなものを発散していると考えることができないだろうか」と述べている。加藤は、建築における20世紀はフォルムに偏重していた時代であったと指摘し、「21世紀のマテリアリティを論じるためにANTを参照するならば、マテリアルが行為主体となるという点を、本気で考える必要があるだろう。」と述べている。本展「Texture from Textile」のVol. 1「コンストラクションの系譜」にも共通するが、20世紀という大量生産と消費の時代には、ものが持つこれらが宿す力は疎かにされてきた。ものは人に消費される関係性にあったが、その関係性を見直し、ものが宿す力を再認識することで21世紀の今日的な豊さを発見できるのではないか。高橋が過去の遺物にその豊さを見出していた点は興味深い。

高橋が、京都・祇園に残した総合芸術空間「T.T」にも、建築空間に、ウィルトゥスを秘めている遺物が使われている。例えばショップで衣服が陳列されている床の間のような空間の柱や梁は、寺社に使われていた100年以上の時間が経過した古材が使用されていたりする。また、入口正面に置かれた彫刻作品は、磨けば黒く艶が出る玄武岩の特質を半分以上捨て去り、側面は、長年雨風にさらされて形作られた自然の姿がそのまま生かされている。



(写真上) 寺社仏閣に使われていた100年以上前の古材を用いた総合芸術空間「T.T」の床の間
(写真下) 玄武岩で制作された高橋の彫刻作品「無限門」(2021、玄武岩、86.5×126×85.5cm)

さらに同じ空間にある高橋の手がけた衣服は、ボタンも鋲止め加工をなされていないため、すでに鋲びているものがある。鋲びていないボタンでも、洗濯をし、着用し続けるうちに自然と鋲びていくという。これらは当時のボタンを忠実に再現した結果ではあると思われるが、それらがもたらすのは単なる経年による美しさだけではない。ものが時間の経過を宿することで、人々に与える精神的効力があるように思う。

建築家の細尾直久は、京都・西陣織の織屋を出自とするが、自身の建築を思考する上で、「工芸建築」というメッセージを発する。細尾直久が手がけたこの株式会社細尾の本社ビルにおいても、版築や箔打などのさまざまな工芸的技巧が凝らされている。これらは贅の極みとも取れるが、一方では、これらの手工芸によって生み出されたものが放つ独特的の「ウィルトゥス」があるように思う。大量生産品とは異なり、手工芸は物に長い命を与えるという意味において、現代における「贅」の価値を再考していくことの必要性があるようと思えるのである。

話は少し逸れたが、高橋はものと時間の関係性について、以下のように自身の考えを書き残している。

「時間や自然、人といったコントロールできない偶発的な物語にこそ美しさがあり、こころを満たす余白があるのではないか。価値あるものだけが時を越え、生み出す者の想いとともに未来へと生き続ける。過去の遺物を、いまに甦らせることで未來の考古物を発掘するのだ。」

それはまさに「Texture from Textile」が、贅を尽くした織物が持つ、マテリアリティとしての力を再認識し、歴史とともに現在、そして未来に問いかければならない問題意識と深く通ずるものがある。本展で、高橋の1900年代初頭の衣服を通し、高橋が考えていただろう「時間がもたらす力」をご体感いただけると幸いある。

高橋大雅

1995年生まれ。2010年ロンドン国際芸術高校に入学し、2013年セントラル・セント・マーチンズに進学。2015年ベルギーのアントワープやロンドンのメゾンでデザインシアスタントを経験。2017年同大学を卒業後、渡米。TaigaTakahashi,inc.をニューヨークで設立。2021年12月京都祇園に高橋がデザインした服・建築・茶室・彫刻作品からなる「服・食・住」すべてを体験できる総合芸術空間「TT」をオープン。

「Texture from Textile Vol. 2 時間の衣—高橋大雅ヴィンテージ・コレクション」

会期：2022年12月3日 [土]-2023年3月12日 [日]

会場：HOSOO GALLERY 京都市中京区柿本町412 075-221-8888

